

【別紙】

1 当事者の概要

(1) 申立人

申立人X1は、肩書地に事務所を置き、個人加盟の組合員により組織される、いわゆる地域合同労働組合である。

(2) 被申立人

被申立人Y1は、肩書地に事務所を置き、自動車運転士及びそれに付帯する職種の労働者をもって組織され、運転士等を求める事業者に対し組合員である運転士等を供給する労働者供給事業を行う法人である労働組合であり、六つの分会及び東日本事務所により構成される。

2 事件の概要

令和3年12月21日、X1は、Z1分会に対し、A1の組合加入を通知するとともに、同人に対する配転又は退職の要求やハラスメントなどを議題とする団体交渉を申し入れたところ、4年1月12日、X1とY1及びZ1分会との間で第1回団体交渉が行われた。

2月8日、X1がY1及びZ1分会に対し、第2回団体交渉を申し入れたところ、Y1は、A1の問題についてはZ1分会に全て委ねているため対応しない旨を回答した。

3 主文の要旨 <全部救済>

- (1) Y1は、X1が令和4年2月8日付けで申し入れた団体交渉に応じなければならない。
- (2) 文書交付及び掲示
- (3) 上記(2)の履行報告

4 判断の要旨

(1) Y1がA1との関係で労働組合法上の使用者に当たるか

A1との雇用契約の締結当事者となったのは、Y1ではなくZ1分会であったことは当事者間に争いがなく、A1は、分会長の指示の下に業務を行っていたのであるから、A1の労働条件を直接決定し、同人への業務上の指揮命令を行っていたのはZ1分会であるとみることができる。

しかし、Y1とZ1分会との関係について、①Z1分会は法人格を有しない一方で、Y1は独立した法人格を有し、厚生労働大臣から許可を受けて、Z1分会を含む六つの分会等において労働者供給事業を行う事業主体であると認められること、②分会長を含むZ1分会の組合員は、同時にY1の組合員であると認められること、③Y1はZ1分会を労供事業所として申請し、労働者供給事業の許可を受けており、Z1分会ではY1が供給先事業者と締結した労働者供給契約に基づき労働者供給事業を行っていたこと、④分会長は労供事業所の責任者としてY1が許可を受けた労働者供給事業に従事し、Y1から給与名目の金銭を支給されていたことから、分会長はY1の被用者といえること、⑤A1は、Z1分会長の指示の下、Z1分会において、会計事務や電話対応、帳簿作成などといった労働者供給事業に係る配車業務の補助を行っていたのであり、Y1が行う労働者供給事業に関する事務作業を行う労働者であることから、A1の労務提供先はY1であると評価することができること、⑥Z1分会はY1の決定に抵触した行為を行うことができない上、法律上労働者供給事業は無料で行う旨規定されており、Z1分会はY1から支給を受ける分会活動費以外に独自に収入を獲得する機会を有していないと推認できることなどの事情が認められる。

加えて、①A1に対する退職要求を決定したZ1分会運営委員会には、Y1の役員でもある支部執行委員も参加していたこと、②上記運営委員会では、A1の退職又は東日本事務所

への配転を決定したところ、東日本事務所はY1直轄の事業所であることから、Z1分会の一存では上記配転を決定できないといえ、支部執行委員がY1としての立場で上記運営委員会に関与していたと推認できること、③前分会長とA1との間のトラブルの際、支部執行委員長がZ1分会運営委員会に出席し、両者の勤務が重ならないように決めて問題解決を図ったこと、④Y1は、分会長に対する統制権限を有していることなどの事情に鑑みると、Y1はA1の労働環境について、直接の雇用主であるZ1分会と同視できる程度に現実的かつ具体的に支配、決定することが可能であったと評価することができる。

以上のことから、Y1は、A1との関係において、労働組合法上の使用者に当たるといえる。

- (2) Y1がA1との関係で労働組合法上の使用者に当たる場合、X1が4年2月8日付けで申し入れた団体交渉にY1が応じなかったことは、正当な理由のない団体交渉の拒否に当たるか

前記(1)とおり、Y1はA1の労働組合法上の使用者である。

そして、4年2月8日付けの団体交渉申入書及び要求書に記載された団体交渉の議題であるA1に対する解雇通告の撤回や労働条件の改善、分会長によるハラスメントの問題などは、いずれもA1の労働組合法上の使用者が応じるべき義務的団体交渉事項であり、特にハラスメントの問題は、Z1分会の団体交渉担当者である分会長自身が一方当事者であって、前分会長とA1との間のトラブルの際には支部執行委員長が関与して問題解決を図った事例もあり、統制権限を有するY1の関与が必要となることが強く想定されることから、Y1は、X1が4年2月8日付けで申し入れた団体交渉に応じる義務があったといえる。

そして、第1回団体交渉後の経緯によれば、X1側がY1に対して、分会長は当事者なので解決できないと思う、Y1として解決に向けて取り組んでほしいと伝えたにもかかわらず、支部副執行委員長は、飽くまでもZ1分会が雇っている書記の問題である、Z1分会は独立採算制でありY1の下部組織ではないため口出しできないなどと発言していたこと、X1とZ1分会との間で第2回団体交渉は行われたものの、Y1は、同団体交渉について、Y1としての対応を行っていなかったことに加え、Y1が、本件申立て後も団体交渉を拒絶したこと自体は一貫して争っていないことを併せて考慮すると、Y1は、X1が4年2月8日付けで申し入れた団体交渉に一切応じていなかったことは明らかである。

以上のことから、X1が4年2月8日付けで申し入れた団体交渉にY1が応じなかったことは、正当な理由のない団体交渉拒否に当たる。

5 命令書交付の経過

- | | |
|---------------|-----------------|
| (1) 申立年月日 | 令和4年6月17日 |
| (2) 公益委員会議の合議 | 令和7年3月4日及び4月22日 |
| (3) 命令書交付日 | 令和7年6月4日 |